東京日々新聞

四百九一號

盆過て宵闇らさき永代の橋間ぬけて家根船の小窓より
ひとりて橋上より投込まんとする女子あり苦しき聲を
あげ助ふ為めけてたすけと呼ぶのこと
せん術波間ふたゝびふと船より三浦
某君が夫たすけと情のひと言
船人らろ得へ

一蒐齋芳幾画

人形甲 貝足屋 渡辺彫栄

カと尽
して漕ぐ船
引揚つゝて
ゝと介抱し

入水の子細と尋聞ふ是ハ中橋
和泉町ある浅野又兵衛が召仕ひて、
安房國舘山町小栄屋七ヶ娘ゆそとて、十七
年五ヶ月ふるれる者ありなれも深川ふ所要
ありて、越きし帰るさ、永代橋のたゝ中ゆて、四十
歳ハ計の剃髪男矢庭ふゆそ投引捕へ懐中の
金三両を奪取り、あまつさへ川中へ突ちこれ
多るよしみるあそ三浦君ふさく懸こと五ひて、ある人の方へ
送り遣せよとと側の人々ふ命じたる程ふ船の濱
町の河岸ふつきの石、折うふ十七日の月ゆる名木の方ふ
さーの乗りて夜ハ初更ふそ帰りふなる 戯化老人識